

## 1P70

## 小児総合病棟における新型コロナ陽性患児発生時の机上訓練の実施～フロアマップとエマルゴ人形を使用して～

藤多弘美<sup>1</sup>、渡邊裕美<sup>1</sup>、高梨都<sup>1</sup>、森輝美<sup>1</sup>、中村広大<sup>2</sup>

<sup>1</sup>鳥取大学医学部附属病院 病棟3階B

<sup>2</sup>鳥取大学医学部附属病院 感染制御部

## 【はじめに】

当院の小児総合病棟は0歳から15歳未満、あるいは20歳以下の小児慢性特定疾患を有した患児が入院している。特に小児は免疫力が弱く、易感染状態を呈している児も多い。当院は新型コロナウイルス重点医療機関であり、および、発熱や感冒症状のある患児も多いことから、病棟内で新型コロナ陽性患児の発生時の体制を整えておくことが急務であると感じた。そこで感染管理認定看護師（以下感染CN）と共に「小児総合病棟内で新型コロナ陽性患児の発生時の対応」について騎乗訓練を行った取り組みについて報告する。

## 【目的】

小児総合病棟で、新型コロナ陽性患児が発生した際の机上訓練を実施し効果を明らかにする。

## 【倫理的配慮】

発表の際は個人が特定されないよう配慮し、看護部倫理審査会にて承認を得た。

## 【方法】

1. 小児科系医師、看護師、感染CNと共に「小児総合病棟内で新型コロナ陽性患児の発生時の対応」について机上訓練を実施した。

1) 机上訓練は、ホワイトボードを用い、現在の入床患児のフロアマップを作成し、エマルゴ人形を使用した訓練内容とした。

2) 訓練の設定は、両親の付き添いの交代があった患児の発熱症例とし、エマルゴ人形で患児の動きと看護師の対応や役割を確認した。

3) 訓練の経過や実際を、クロノロジーにまとめ振り返りに使用した。

2. 机上訓練では、感染CNがファシリテーターを担当し、途中で対応や注意点を説明の補足を行いながら訓練の進行を行った。

3. 机上訓練終了後理解度のアンケート調査を行った。

4. 机上訓練の学びをもとに「新型コロナ陽性患児発生時のフロー図」と「アクションカード」を作成した。

## 【結果】

実際の患児のフロアマップを使用した机上訓練を行うことで、参加者は発生時の対応や報告先を理解することができた。小児科系医師、感染CNと連携した机上訓練は、病棟看護師の対応だけでなく他部門と協働した発生時の動きを確認することができた。

## 【考察】

小児総合病棟内で新型コロナ陽性患児の発生時の対応訓練は、個々の役割や動き、報告事項が明確となり、自分がどう動くべきかの役割が認識できたと考える。さらに机上訓練を感染CNと連携したことで院内ルールに沿った対応に繋げることができたと考える。

## 【まとめ】

小児総合病棟内で新型コロナ陽性患児の発生時の対応訓練は有効であった。

## 1P71

## 養育者が子どもに行った新型コロナウイルス感染症予防対策と生活の変化

小原綾夏<sup>1</sup>、飯島未彩<sup>1</sup>、池田愛恵<sup>1</sup>、市原沙弥香<sup>1</sup>、伊藤愛望里<sup>1</sup>、加賀小百合<sup>1</sup>、下重茜梨<sup>1</sup>、高橋菜桜<sup>1</sup>、野尻茉希<sup>1</sup>、平柳結子<sup>1</sup>、柳田瑠奈<sup>1</sup>、久保恭子<sup>2</sup>、穴戸路佳<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部

<sup>2</sup>東京医療保健大学立川看護学部

## 【研究目的】

本研究の目的は、自粛期間中に養育者が行ったコロナ感染症予防対策とそれに伴う生活の変化を明らかにし、今後コロナ感染症の再流行時の対策を検討する資料を得ることである。

## 【方法】

2020年7月20日～年7月23日に、1都3県に住み、3歳から10歳までの子どもを持つ養育者300名を対象にWEBによる無記名自記式質問紙調査を依頼した。分析は記述統計、 $\chi^2$ 検定をJMPを使用し統計的に処理した。所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

有効回答数は248であった。対象者の性別は男性134名、女性114名、平均年齢は40.1±7.1歳であった。職業は会社員136名（54.8%）であった。コロナ感染症に危機感を感じた人は68.6%であり、内容は地域・職場・通勤で自分が感染源になる不安、医療崩壊や確実な治療方法がないこと、国・メディアへの不安であった。自粛期間中ストレスを感じたと回答した養育者は54.7%、養育者から見て子どもがストレスを感じていると回答した人は51.6%であった。具体的な子どものストレス行動の表れとして、癇癪・兄弟けんか、おとなしい、退行行動等の解答があった。親が行った子どもの感染予防対策では自粛前と比べて子どもの手洗いの時間・回数増加、石鹸の使用、外出先でも行う、含嗽の頻度・時間の増加、うがい薬の使用があった。マスクは外出時着用、家の中でも着用があった。生活の変化として子どもの外出・外遊びでは、人ごみを避ける、野外（公園・広場）に外出、必要以外外出しない、子どもが遊ぶ時には絶対に外出させない、外出は短時間するがあった。コロナ感染症に対して危機感を感じたと回答した養育者のうち、子どもの手洗いの時間の増加（ $p=.001$ ）、外出時のマスクの着用（ $p<.001$ ）、除菌シートの使用（ $p<.001$ ）と有意な差があった。

## 【考察】

本調査の結果から、コロナ感染症に対しての危機感によって予防行動やストレスがみられ、危機感を感じているほど基本的な予防対策が出来ていた。新しい生活様式とともに運動不足解消等自粛生活の中でも新たな工夫、発信が子どもたちの成長発達向上につながると考える。引き続き、意識的な感染予防対策や三密を避ける行動などのコロナ感染症予防対策を継続していく必要があると考える。